

天文教育

5

2016

Japanese Society for Education and Popularization of Astronomy



<投稿・報告>能動的な知的体験の場を提供する／三重県美杉町
での天文秘密基地づくり／2016 年春の天文教育フォーラム／
Thai Astronomical Conference (Student Session) 報告 他
天文教育普及研究会

本誌原稿募集のお知らせ

編集部では下記の原稿を募集しております。会員の皆様からの活発なご投稿をお待ちしております。

1. **原著論文**：天文教育・普及について、オリジナル性があり考察が優れ、学術論文として主な内容が印刷発表されていないもの。表題、アブストラクトには英文も付けてください。
 2. **解説記事**：天文学や天文教育・普及に関する解説・紹介記事。分量は刷り上がりで6~10ページ程度。
 3. **各種の報告など**：支部会やワーキンググループの活動報告、各種のイベントの報告、また天文教育・普及に関する授業の実践例など。分量は刷り上がりで2~4ページ程度。
 4. **書評**：天文学や天文教育・普及に関する書籍の紹介。分量は刷り上がりで1ページ程度。
 5. **会員の声**：会員の皆様からのご意見・ご感想など。分量は刷り上がりで1ページ程度。
 6. **表紙の写真**：タイトルと400字以内の「表紙の言葉」とともにご投稿ください（写真のみでも構いません）。
 7. **情報コーナー（各種会合・イベントの告知など）**：支部会やワーキンググループの会合、また天文学に関する各種の会合・イベントなどの情報。分量は任意ですが、スペースの関係で適宜省略させていただく場合があります。会合・イベントの開催日と会誌の発行日（奇数月下旬）にご留意ください。
- ・締め切りは1は原則として奇数月末日、2~7は偶数月15日。投稿先は post@tenkyo.net です。
- ・広告掲載を希望される方は事務局 (jimu@tenkyo.net) までお申込みください。掲載料はB5判1ページ ¥20,000-、半ページ ¥12,000-、1/4ページ ¥7,000-、チラシの折り込み ¥20,000-です。
- ※本誌に掲載された記事は、当会Webサイト (<http://tenkyo.net/>) にてPDFファイルの形で公開を予定しております。
インターネットでの公開に差し障りのある場合は、ご投稿の際にその旨ご連絡をお願いいたします。
- なお、2014年9月号から、当会会員に対しては会誌発行後に速やかに、パスワード制限※をかけた形で閲覧できるようになります。発行から1年経過後にパスワード制限を解除して、広く一般に公開いたします。
- ※今号「事務局からのお知らせ」の53頁をご参照ください。

【編集委員会からのお願い】

『天文教育』の編集は、すべて会員からなる編集委員によって行なわれています。ご投稿の際には以下の点についてご協力いただけますよう宜しくお願ひいたします。

- ・原稿の投稿は、原則としてMicrosoft Wordファイルでお願いします。
- ・執筆用のテンプレートがホームページ (<http://tenkyo.net/>) からダウンロードできます。できるだけこのテンプレートをご利用くださるようお願いします（執筆上の留意点なども記しています）。
- ・充分に推敲を重ねた完全原稿でご提出ください。分量や内容によっては手直しいただく場合もあります。
- ・提出データは必ず各自でバックアップしておいてください。
- ・Word以外に一太郎ファイルやテキストファイルでも受け付けております。
- ・原稿のご投稿やご質問は電子メールにて、下記のアドレスへお願ひいたします。

投稿先・質問先 メールアドレス：post@tenkyo.net

表紙の言葉

火星の準接近

日時：2016年5月8日02時11分、ISO4000、露出25秒、Canon EOS5D MkIII、f1=28mm相当、F=2.8
撮影地：志賀高原（長野・群馬の県境）

春の夜の南の空、さそり座の1等星アンタレスの右に明るいオレンジ色の星が輝いている。火星だ。火星は、地球のひとつ外側の軌道を公転している惑星だ。地球が火星を追い越していく2年2か月ごとに、両者の距離が近づき明るく見える。ところで、火星の軌道は橢円のため、15年周期で最接近時の距離が5600万kmから1億kmと大きく変化する。今回の最接近は5月31日、その距離は7530万kmである。これは準大接近とい

えるだろう。今回、この火星の左に土星も輝いている。春から夏にかけて、アンタレスと火星と土星が「赤い小三角形」を作る。この限定的な「赤い小三角形」、アンタレスを基準に火星と土星の動きの様子を日々観察してみるのはいかがであろう。火星と土星の動きの違いは、地球と惑星の相対公転角速度の違いを示している。ケプラーの法則を念頭に置くと、火星までの距離と土星までの距離の違いを実感できるのではないだろうか。なお、次回の最接近は2018年7月31日、その距離は5750万kmである。これは、2003年以来の大接近となる。

撮影と文：大西浩次